

## 近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立 と下中弥三郎：「イデオロギー」と「大 衆」の時代のはじまりの中で

飯田, 泰三

---

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

99

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2001-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003508>

# 近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立と下中弥三郎

—「イデオロギー」と「大衆」の時代のはじまりの中で—

飯田泰三

昨年度予定されていた本誌「松下圭一教授退職記念号」にぜひ寄稿したいと思ったのであるが、同記念号が松下教授の意向で取り止めになったので、私は本号にいわば勝手連的に、教授にデレイトする論文を寄せることにした。ただし本稿はまったくの新稿ではなく、昨年CD-ROM版で日立デジタル平凡社から刊行された『百科で見る二〇世紀』に寄せたものの活字版である。同CD-ROMは、一九三二年から三年にかけて平凡社から刊行された全一七巻に及ぶ『大百科事典』から約八五〇項目を復刻し、各項目を〈くらし〉〈都市問題〉〈政治〉〈軍事〉などの三〇テーマに分類し、解説を付し、さらに『世界大百科事典第二版』の関連項目をも引くことができるようにしたものである。本稿はそれらにたいする全体的解説の一つとして書いたものに若干の補正を加えたものである。なお、文中「↓」で示したのは、『大百科事典』の関連項目とその執筆者である。

## 一 「主義者」と「思想問題」の成立史

『大百科事典』が成立した昭和初年は「主義」とか「思想」という言葉が特別な意味をもって通用した時代だった。いわば「主義者」「思想問題」「思想犯」の時代である（「思想かぶれ」とか「思想中毒」という言葉もあった）。それは言

い換えれば「イデオロギーの時代」であった(↓「イデオロギー」杉村広蔵)。(ちなみに、マルクスの『ドイッチェ・イデオロギー』の一部が「独逸的観念形態」として榎田民蔵・森戸辰男訳で雑誌『我等』に掲載されたのは一九二六年。また、三木清『観念形態論』の刊行が一九三二年である)。「共産主義」「アナキズム」「ギルド社会主義」等の「社会主義」系統の思想だけでなく、「国民社会主義」や「社会ファシズム」、さらには「農本主義」や「大アジア主義」等々の、それぞれに「現状打破」と「改造」を掲げる諸々の「イデオロギー」が、覇を競い合っていた時代である(↓「社会主義」大塚金之助・萩原謙造、「共産主義」石浜知行、「アナキズム」石川三四郎、「ギルド社会主義」室伏高信、「国民社会主義」室伏、「社会ファシズム」室伏、「農本主義」室伏、「大亜細亜主義」下中弥三郎)。そして「主義者と鮮人」が、「国体ヲ変革シ、及び私有財産制度ヲ否認セントスル」「思想犯」として、治安維持法による検挙対象(最高刑死刑)となったのであった(↓「治安維持法」鈴木義男、「思想検事」相場敏夫、「特高部」鈴木)。その中心にマルクス主義があった(↓「マルクス主義」小泉信三)。近代日本思想史においてマルクス主義を持った巨大な意味については別に論ずるしかないが、とりわけそれは、第一次世界大戦・ロシア革命後の「大正デモクラシー」と、満州事変・日中戦争後の「昭和ファシズム」とに挟まれた時期(一九一九—一九三三)において、この国の知識人の内面に決定的ともいえる刻印をきざみつけたのであった。そうした意味での「主義」と「思想」の成立史を簡単にふりかえってみよう。

明治十年代の「自由民権」期は「国事犯の時代」(木下尚江「懺悔」)とも言われたが、「思想」とか「主義」という言葉は使われなかったようだ。中江兆民などは「理義」という言葉を愛用し「古来日本に哲学なし」といった(↓「中江兆民」山川均)。もっとも、明治二一年の川上音二郎の「オッペケペー節」になると「政治の思想」という言葉が、唐突ともいえる形で出てくる。「権利幸福嫌ひな人に 自由湯をば飲みたい……固い犄角取れて マンテルズボン

に人力車 意気な束髪ボンネット 貴女に紳士のいでたちで うはべの飾りは好けれども 政治の思想が欠乏だ 天地の真理がわからない 心に自由の種を蒔け オッペケペッポーペッポー」(「オッペケペー節」藤田徳太郎)

明治二十年代初頭、徳富蘇峰が「平民主義」を掲げて登場し、一時「市邑的社会主义」や「国家的社会主义」を紹介したのち、日清戦争後は「帝国主義」と「皇室中心主義」へと転ずる(「徳富蘇峰」無署名)。同じころ陸羯南は「国民論派」ないしは「国民主義」を称した(「陸実」大川)。(ただし羯南と思想的に近かった志賀重昂などは「國粹保存主義」を名乗った。)さらに明治三十年代に入り、一八八七年五月、高山樗牛が「日本主義を賛す」で雑誌『太陽』の主幹としてデビュー(同時に井上哲次郎・木村鷹太郎らと雑誌『日本主義』を創刊)、翌年には「明治思想の変遷」も書いている(「高山樗牛」高須芳次郎、「日本主義」小栗慶太郎)。他方、一九〇三年には幸徳秋水の『社会主義神髓』と片山潜の『我社会主義』が現われる(「幸徳伝次郎」山川均、「片山潜」無署名)。秋水には『廿世紀之怪物帝国主義』もある。同じころ「自我」の目覚めと「煩悶の時代」の到来とともに「自然主義」文学が流行する。そして明治末年になると、すでに日露戦下に「非戦論」で「非国民」とされた社会主義者・無政府主義者たちが、大逆事件の衝撃のもと、「危険思想」の持主として苛酷な取締対象になる。ただし三宅雪嶺のような「事大主義は危険思想と孰れぞ」という論もあった(「三宅雄一郎」森谷秀亮)。

ついで大正初年には、『近代思想と実生活』(一九一、岩野泡鳴)、『近代思想の解剖』(一九一、樋口竜峽)が著わされ、雑誌『近代思想』(一九一〇・一〇—一四・九、大杉栄・荒畑寒村)が創刊されるなど、「近代思想」がクローズアップされる。もっとも、同じ用語が用いられても泡鳴のそれは、「個人主義的国家観から来た一個の日本主義者」としての立場から「二重生活の弊害」を言うものであった。小説家としても多産だった泡鳴だが、かたわら『神秘的

『日本主義』を創刊した(↓「岩野泡鳴」向坂)。他方、樋口竜峽のそれは、ルソーから説き起こし「自由平等の思想」「科学的精神の支配」「唯物観の傾向」「近代の個人主義」「社会本位の思想」とつづけ、「世紀末の懷疑と悲哀」を論じたうえで「新思想の曙光」を、プラグマティズム、ベルグソン、「新ロマンチーク」、「人格主義」に見るといってものだった。(同年刊の『群衆論』で「群衆心理」「暗示と模倣」「群衆の指導者」「輿論と群衆心理」なども論じた樋口は、東京帝大出の『社会学小史』等の著作もある文学士で、のち政友会の代議士になった。)また、大杉栄が『近代思想』を舞台として独自のアナキズム思想を確立していったのは周知のところだが、ベルグソン、クロポトキン、フランス社会学などを踏まえた「本能と創造」「征服の事実」「生の拡充」等の諸論文がこの雑誌の初期を飾った(↓「大杉栄」近藤憲二)。

同じころ、一九一三年、下中弥三郎が成蹊社から『や、此は便利だ』(通称『や便』)という、当時「袖珍本」と呼ばれた小型本を出版した。書名の頭に小字で「ポケット顧問」というサブタイトルがついている。「日常の談話に上り、新聞、雑誌に現はる、新意語・流行語・故事熟語等の中、や、難解のものを蒐めて簡単に解説を試み」たものである(同書「例言」)。当時、埼玉県師範学校の教諭をしていた下中が、学生の文字知識の不足、用字用語の無茶苦茶さにあきれて思いついたものだという。ところが成蹊社が破産したので、この本の紙型を買って一九一四年春、妻の下中緑の名義で出版し、発売後一年で三万部出た。これが「平凡社」の創業である。この『や便』にも上記の諸「主義」や諸「思想」の、簡にして要を得た解説が収録されている(『や便』は一九九八年六月、平凡社から復刻本が出た。その第一篇、其一「最新の術語並に流行語」の主要項目は、次のようなものである(五十首順)。

「アイコンクラズム 偶像破壊主義」「新しい女」「印象主義」「エスベラント」「危険思想」「近代思想」「共産主義」

「虚無主義」「享楽主義」「クーデター」「群衆心理」「官僚政治」「懷疑思想」「快樂説」「芸術の爲の芸術」「現実暴露」「憲政擁護」「功利主義」「個人主義」「国家主義」「コンベンションナリズム 因習主義」「産業革命」「サンヂカリズム」「示意運動 デモンストレーション」「集産主義 コレクティブズム」「重商主義」「重農主義」「自我實現説」「自然主義」「時代精神・時代思潮・時代思想」「実証説 ポジティブズム」「自然淘汰」「進化論 エポリューションニズム」「人道教ヒューマニズム・ドクトリン」「人生の爲の芸術」「神秘主義」「象徴主義」「社会主義」「社会政策」「宿命説」「主知説インテレクチュアリズム」「主意説」「世紀末」「生存競争」「世界主義 コスモポリタニズム」「センチメンタリズム」「大  
学拡張 ユニヴァーシティー・エキステンション」「第三帝国」「大陸政策」「直覚の哲学」「帝国主義」「超人主義」「デカ  
ダン」「デパートメント・ストアー」「田園都市運動」「デモクラシー」「南進乎北進乎」「二重人格」「二重生活」「ネ  
オ・ローマンチズム」「閥」「万国平和会議」「美的生活」「ヒューマニズム 人本主義」「ブリューストッキング  
青鞥」「婦人問題」「普通選挙」「プラグマチズム」「ボイコット」「マキアベリズム」「未来派」「ミリタリズム 軍國主  
義」「無政府主義 アナーキズム」「モンロー主義」「ユーゼニクス」「流動の哲学」「ローマンチズム 華想主義」等。

## 二 デモクラシーから社会改造へ

大正時代が進むと、周知の吉野作造による「民本主義」の提唱（一九一六）が「デモクラシー時代」の幕を開け、シベリア出兵、米騒動、ロシア革命、第一次大戦終結、ドイツ革命とつづく情勢のなか、労働運動の昂揚や、学生運動団体「新人会」、および知識人の文化運動団体「黎明会」の結成、等があった（↓「民本主義」佐々弘雄、「新人会」杉

山謙治、「黎明会」無署名。なかんずく一九一九年は、さまざまの「改造論」と諸「イズム」が渦巻く、思想的激動の年となった。同年二月の『中央公論』に室伏高信が、「われ等は今ま世界とともに改造の十字路に立つてゐる」という書き出しで、多様な「社会改造の主義」が噴出し入り乱れ、目まぐるしく交代していった「改造論の一年」を回顧している。そこで挙げられた諸「主義」は、「第三階級のブルジョア・ラヂカルの立場」からの「政治的デモクラシー」に始まり、ついで「第四階級の立場から」の「ソーシヤル・デモクラシー」へ、さらにそれが分化して「正統マルクス派社会主義」「国家社会主義」「修正派社会主義」「ギルド社会主義」「無政府主義またはアナアコ・サンデカリズム」「I・W・W・主義」「分産主義」等々になるといふ次第である。室伏自身、一九一九年四月に『デモクラシー講話』を刊行してデビュー、雑誌『批評』も創刊（一九一九・三）して、『社会主義と民主主義』（一九一九・五）ついで『社会主義批判』（一九一九・一）にまとめられる諸論稿を発表していく（飯田泰三編・解題『復刻版 批評』全三巻、龍溪書舎、参照）。

同じ一九一九年の八月、下中弥三郎は、かつて教えた埼玉県師範学校卒業の小学校教師たちを中心に組織して日本最初の教員組合「啓明会」を結成し、翌年「日本教員組合啓明会」と改称する（↓「教員組合」石谷信保）。『下中弥三郎事典』（二九六五）によると、下中は兵庫県多紀郡今田村下立杭という旧丹波篠山藩領の山間の寒村に生れ、小学校を前期三年で了え退学、ただちに家業の窯業（立杭焼）窯元に従い、一七歳で村に陶業販売組合を結成し組合長となった。一九歳の一八九七年、高等工業専門学校窯業科での研究を志して入学準備のために神戸に出たが、その入学資格を得るため小学校准教員検定試験を受けようとして神戸市立雲中小学校代用教員をしているうち、子供が可愛くなり教育への情熱が深まって、教師で身を立てることに志を転じた。やがて小学校正教員検定試験に合格し小学校訓

導を三年間勤め、さらに中等教員国漢科の受験を志して一九〇二年上京する。『婦女新聞』『児童新聞』の記者、日本女子美術学校幹事、等を務めつつ独学し、一九一〇年、三三歳のとき中等教員教育科の検定試験に合格して埼玉県師範学校の教諭になった。そして一九一四年、前述の「平凡社」を創設し『や、此は便利だ』を出版、さらに一九一九年の「啓明会」結成に至るのである。いわゆる大正デモクラシーを主導した「制度通過型のインテリゲンチヤ」（藤田省三）たちとは対照的な、苦学力行型自己形成による社会的デビューであった。

「吾等は真人間の生活を基調とする社会生活の実現を理想とす」で始まり、「教師である前に人間であれ」をもっぱら強調した啓明会の「宣言」は、あまりにも「理想主義的・人道主義的」で、「労働組合運動」としての綱領的要求が欠如しているなどと評された。しかし「学習権の主張」（『啓明』一九二〇・二二）や「教師も労働者である」（『解放』一九二二・二〇）という思想、また、「ためにする教育」（『国のために、親のために、主人のために、夫のために』への批判）『万人労働の教育』（一九二三）に裏づけられた、「教育自治の実現」のための「教育委員会の設置」構想、あるいは、「画一無生氣なる規則万能の教育を排し、教育自由の範囲を広くし、以て児童の生活と生長とを尊重し、個性本位の教育を……」という観点からの教育方法の自由、なかならず、教員のカリキュラム自主編成権の主張（『教育改造の四綱領』一九二〇）、さらには「校長公選論」（『啓明会熊谷大会、一九二〇・二二』）などは、今日なお新鮮なものがある。下中はそうした理念による新教育運動の実践機関として一九二三年八月、野口援太郎・為藤五郎・志垣寛と「教育の世紀社」を設立し、雑誌『教育の世紀』を刊行、一九二四年四月からは実験学校「児童の村小学校」を創設した。池袋の野口の私邸を開放して校舎に当て、岐阜女子師範から呼んだ野村芳兵衛を校長格に、全校児童六〇人で発足したものである。教室・カリキュラム・教師・時間割を定めず、「生活することそのことが教育である」をモットーに、無賞



罰・無試験で、児童自身が「自由と協働の生活」を築くことを目標にして、一九三六年の解散までに九四人の卒業生を世に送った。

わが国における第一回のメーデー(↓「メーデー」木村久一)は、一九二〇年五月二日、労働組合総同盟友愛会(↓「友愛会」片山哲)・啓明会・正進会等、九団体の共催により、上野公園で挙行された。このとき下中は啓明会を代表して演壇に立ち、また当日歌われたメーデー歌は下中の作詞であったが、それだけでなく下中は各組合の恒久的な連絡団体の結成を提唱、それにより同一六日、既成一四組合加盟の「労働組合同盟会」の創立を見た。しかし一九二二年の「総連合運動」の中では、「アナ・ホル」対立を背景に、「総同盟」系の「集合同的論」と「同盟会」系の「自由連合論」の対立が深まり、九月一〇日の創立準備委員会で加入条件が「五〇名以上の組合員を有する、闘争団体であること」と決定され、おりから学務当局からの圧迫で組合員数の急激な減少を見ていた日本教員組合啓明会は、総連合への参加資格を失う。以後、下中の労働運動への直接的な関与は途絶える。

なお、下中が啓明会結成当初から協力を得ていた教育学者に早大商学部教授・木村久一があった。下中は一九一九年八月結成の啓明会を全国的組織として展開すべく同年一月、関西に遊説して講演会を開くが、そのとき同行したのが木村であった。そこで下中の「教育解放論」と並んで、木村は「改造の根本」を講演した。木村は一八八三年山形県に生れ、一九一三年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業後、早稲田大学などで教鞭を執っていたが、当時の論壇の「改造」思潮の論客として活躍中だったのである。この講演旅行と同じころ、島中雄三が中心となり、岡悌治、石田友治、北沢新次郎、野村隈畔、安部磯雄、杉森孝次郎などを会員として「文化学会」が結成され、下中とともに木村もその熱心なメンバーだった。島中雄三(中央公論社社長になった嶋中雄作の兄)は、下中が一九〇二年に兵庫から上

京してきた頃からの同志的親友で、『児童新聞』『婦女新聞』の編集を共にしたことがあり、啓明会の世話人にもなつて機関誌『啓明』やその後継誌『文化運動』にもしばしば執筆していた。おそらく木村は、その島中の紹介で下中を知つたのであろう。一九二二年六月に岩波書店から刊行された『新日本の建設』という本がある。この本は木村久一がある事件で起訴され東京監獄に収監されたのを慰めるため、星島二郎、小松謙助らが世話人となって諸家に執筆を依頼して成つたものである。ある事件とは、当時の新聞記事によると、木村が友人から研究資料として入手した「露西亜過激派」の宣伝文書を折から来合わせた中央大学の学生に請われて与え、それを学生が謄写して某研究会で配布したため、一九二〇年五月、学生ともども過激主義宣伝の容疑で起訴されたものである。同書に寄稿したのは、牧野英一、穂積重遠、末弘徹太郎、三宅雄二郎、吉野作造、杉森孝次郎、安部磯雄、阿部次郎、森本厚吉、木村徳蔵、権田保之助、大島正徳、小泉信三、福田徳三、長谷川如是閑という顔ぶれで、大正デモクラシー状況の中での木村の人脉の広がりがかがえる。一九三二年、木村は請われて平凡社に入り、『大百科事典』編集長の職に就いた。「エンサイクロペディア」の訳語に「事典」を当てたのは木村のアイデアだったといわれる（ちなみに、平凡社版に先行して一九二一一九一九年に三省堂から刊行された全一〇巻のそれは、『日本百科大辞典』であった）。

### 三 「大衆」観登場の諸相

一九二四年に発足した平凡社——その社名は下中の妻みどりの命名によるとい——は、啓明会や教育の世紀社関係の友人、運動仲間、あるいは彼らが紹介して寄越す青年たちが、入れ代わり立ち寄る梁山泊的光景を呈していたが、

近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立と下中弥三郎（飯田）

一九二三年六月、株式会社組織に発展し、下中が社長、高橋守平が副社長に就任した。高橋は、埼玉県児玉郡丹荘村の大地主の家に生れ、埼玉師範で下中の薫陶を受けて一九一六年に卒業した人物。居村の村長から衆議院議員に当選六回、民政党総裁町田忠治の信任を受けた。じつは株式会社平凡社の資本金二万五千円の全額は高橋が出資したものである。ところが株式会社として発足して間もない九月一日、関東大震災で表神保町の新社屋は倒壊し全焼した。そこで社を大阪に移して再建することにしたが、その資金六千円も高橋が出資した。さいわい東京の出版社が全滅状況のため出版ブームが起こり、平凡社は再建に成功して一九二四年一月、東京神田に戻ることができた。このころから同社は本格的な大出版社としての相貌を備えるにいたり、一九二六年には『大西郷全集』全三巻、『尾崎行雄全集』全一〇巻を刊行、ついで一九二七年、『現代大衆文学全集』全六〇巻の予約出版を開始した（予約会員数二五万、第一回「白井喬二集」）。これが同社の歴史にとって一つの画期を形作ることになった。

いわゆる「円本」ブームは、改造社の『現代日本文学全集』（全六三巻、一九二六・二七、予約者三五万）に始まった。二番手が新潮社の『世界文学全集』（全三八巻、予約者五三万）、平凡社の全集は三番手で、新潮社のものが五百頁一円をうたったのに対抗して、千頁一円で募集した。この「円本」ブーム自体が、それまでの知識人や学生だけの、限られた読書階級相手の出版から、従来書物に無縁だった大衆を捲き込んだ「知の大衆化」だったが、下中の企画はそれに「大衆」の文字を冠してその流れをさらに鮮明に示すものだった。「大衆」という言葉が目立ち始めたのは、その前年の一九二六年からである。（仏教では古来、修行者の区分に関わる範疇として「上座部」と対立する「大衆（だいしゅ）部」という言葉があったが、問題は英語の the masses にあたる「大衆」観念の成立である。先に樋口竜峯の『群衆論』に言及したが、the crowd にあたる「群衆」は、ル・ボンの『群衆心理学』の大山郁夫による翻訳「一九〇四」をはじめ、すでに明治末年

に知られていた。)

『大百科』には、「大衆文学」の項目はあるが、「大衆」という項目は立てられていない(↓「大衆文学」吉江喬松)。おそらく一九三二年の段階でも、まだそれは「新語」に属し、学術的に解説を加える用語としては熟していないと見なされたのであろう。ちなみに一九六六年八月発行の『改訂新版』世界大百科事典 一四』では、「大衆」(高橋徹)のほか、「大衆運動」「大衆演劇」「大衆社会」「大衆政党」「大衆デモクラシー」「大衆文学」「大衆文芸論争」「大衆路線」の諸項目が並んでいる。そこで高橋が「大衆」という概念は、近代デモクラシー社会が危機に陥り、民主主義の補正が必要となった一九世紀末から二〇世紀のいわゆる〈マス・エージ〉の所産」と述べているように、世界的に見ても、「大衆」の登場は新しい「二〇世紀的」現象であった。

ともあれ、この国における「大衆」概念は「大衆文芸」という言葉によって先導されて登場した。一九二六年一月、長谷川伸と白井喬二が雑誌『大衆文芸』を創刊し、七月には「第一回サンデー毎日大衆文芸賞」が発表され、さらに八月から、吉川英治「鳴戸秘帖」(大阪毎日)と大仏次郎「照る日くもる日」(大阪朝日)が連載を開始する。その動きを受けての、一九二七年からの平凡社『現代大衆文学全集』の刊行であった。そしてさらにその翌年の一九二八年四月、雑誌『中央公論』が「大衆観」を特集する。長谷川如是閑「政治的概念としての大衆」、高畠素之「大衆主義と資本主義」、青野季吉「大衆の現実について」、鶴見祐輔「壇上から見た現代の大衆」、木村毅「文士の応援演説と大衆の反響」が寄稿されている。

じつは、the massesないしdie Masseを自覚的に「大衆」と訳して用いたのは、高畠素之が最初だった。一九二一年五月、高畠は「大衆社」を興し、週刊新聞『大衆運動』(一〇号で廃刊)を発刊した(↓「高畠素之」小泉信三)。

近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立と下中弥三郎(飯田)

弟子の神永文三の回顧(『大衆』主義)「急進」一九二九・六によると、高島は一九一八年四月、「売文社」を解散して『社会主義研究』を創刊した堺利彦・山川均らと袂を別ち(↓「堺利彦」守田有秋)、『国家社会主義』を創刊したところから「マッス」という言葉に注目し、あれこれと二、三年も模索のすえ「坊主臭い」古語を採用するにいたったという。「消費者本位の大衆運動」(『大衆運動』創刊号)などで高島は、生産者本位の「労働組合運動」では「無産階級の綜合力」を発揮することができず、「一部労働者の利益」のために残余の一般民衆が犠牲にされることになるから、「貧乏」消費不能力」という点で労働者のみならず農民も小商人も安月給取りも一致する「消費者としての無産大衆」こそが、「日常的な政治運動」の主体でなければならぬと主張した。そうして、『資本論』を最初に完訳(一九二〇—二五)した高島だったが、やがて「国家社会主義」に傾斜してゆき、ついには「無産愛国主義」を主張するにいたる。そのさいの鍵となったのが、マス状況における「大衆心理」の重視と、熱狂的なナショナリズム運動を通して衝動的に政治に参加してゆく無産者大衆への期待であった。『中央公論』の「大衆観」特集で彼が「大衆主義」と言ったのは、そうした文脈においてであった。(高島素之は一九二八年二月、病没。)

他方、プロレタリア文学運動における理論的指導者の一人だった青野季吉が同じ「大衆観」特集に登場したのは、彼が一九二六年九月、『文芸戦線』に「自然生長と目的意識」を発表して、当時の福本イズムをめぐる左翼政治戦線分裂の文学運動への波及に一石を投じたことに関わる。青野はそのころレーニンの『何を為すべきか』を『レーニン著作集』(山川均・西雅雄編、一九二六—二七)の一冊として翻訳しており、この論文はレーニンの「大衆の自然生長的エネルギー」に対する「前衛の目的意識的指導」という、いわゆるレーニン主義の根幹となる「前衛」組織と「大衆」運動の関係についての理論を、文芸運動に適用したものであった(↓「レーニン」石浜知行)。レーニンの著作は

ロシア革命の渦中でのアナキズム勢力とのヘゲモニー争いの中で書かれたものだったが——そしてその「党」の理論が、「スターリン主義」体制下「イデオロギーとテロル」による支配に利用されたとき、ハンナ・アレントのいう「全体主義」(ソ連・東欧型)が完成する——、その目的意識的「階級意識」を重視する前衛組織論が、福本イズムにおける「分離結合論」となり、山川イズム(方向転換論)の「大衆」路線との対立に結びついたのである(しかも、折から出されたコミンテルン「二七年テーゼ」は山川と福本の双方を批判し、対立はさらに複雑化する)。

また、鶴見祐輔と木村毅の論は、この一九二八年二月、最初の「普選」による総選挙が行なわれ「無産政党」諸派から八名の当選者を出した状況のもとでの「大衆」の登場の位相に関わる。この位相との関連でいえば、一九二六年三月、月刊誌『大衆』が発刊されている。これは、大山郁夫、市村今朝蔵、黒田寿男、鈴木茂三郎、大森義太郎、有沢広巳ら、単一無産政党をめざすグループの機関誌である。このグループは、第一回普選を控えて無産政党組織準備のために一九二四年八月に結成された「政治研究会」(島中雄三、藤森成吉、鈴木茂三郎を中心に、安部磯雄、大山郁夫、賀川豊彦、高橋亀吉、三輪寿壮、布施辰治らの創立)が分裂し、一九二六年三月、その左派が日本農民組合と合同して労働農民党を結成したが、それがさらに分裂の様相を示していたとき、大山、鈴木らが中間派を含む共同戦線を再建すべく作ったものである。しかし結局、一〇月に労働党は分裂、そして二月になって社会民衆党(委員長安部磯雄)、日本労働党(委員長三輪寿壮)、労働党(第二次、委員長大山郁夫)が相次いで結成されることになる。その政治研究会は、一九二六年一月、機関誌『民衆政治』を『大衆教育』と改題している。かつて新人会がその機関誌名を、『デモクラシー』から『ナロード』に変えたことが想起される。「ヴ・ナロード」「人民の中へ」という、「インテリゲンチヤ」の側からの「大衆」へのアプローチである(↓「インテリゲンチヤ」新居格)。「吾等の輝ける委員長」大山は、

近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立と下中弥三郎(飯田)

その後も「大衆と共に」ある「大衆的日當闘争」を説き続けるが、日本共産党（非合法）による労農党の「戦闘的解體論」との争いに敗れ、一九三二年三月、アメリカへの亡命を余儀なくされる。

なお、一九二九年一〇月に杉森孝次郎を編輯者に社会思想研究所から刊行された『社会科学辞典』には「大衆」および「大衆運動」また「自然成長性」などの項目がある（いずれも安武誠一執筆）。

「大衆（タイシユ） Mass の訳語であつて、左の三様の意味がある。(1)民衆と同義。即ち、労働者、農民、小市民等国民の大多数を含む勤労階級を指す。労働大衆、農民大衆、勤労大衆 (Working Mass)、無産大衆、労農大衆の総称である。この場合には労働組合、農民組合、無産政党から見ても組織者は大衆（未組織大衆）である。(2)組合又は政党に於て一般組合員、平組合員（ランク・アンド・ファイル参照）を指す。(3)共産党等の前衛にあつては、大衆政党、組合が大衆である。例へばコミンテルン等で「大衆へ……」といふ場合は、労働組合に根を張れといふ程の意味である。」

「大衆運動（タイシユウンドー） 大衆の日常利害に即する大衆自身の運動の意であつて、組合運動、大衆政党の運動は凡て大衆運動である。これは殊に、少数者の思想運動乃至は大衆から遊離したる急進運動等と區別して用ひられる。大衆運動は自然成長的運動（自然成長性参照）をその本質とする。尚、屢々集團心理を中心とする運動、即ち多衆運動（別項参照）と同様に用ひられることもある。」

「自然生長性（シゼンセイチョーセイ） 目的意識性と対比して用ひられ、共にレーニン主義の用語である。大衆が自己の労働条件の維持改善のために団結し闘争することは、無産階級がブルジョアに搾取されて居るといふ事実から、期せずして自然に成長して来る性質のものであつて、之を大衆の自然生長性といふ。労働組合の組織、不平不満から勃発するストライキや偶発的暴動、更に進んでは、労働条件の維持改善の要求を政治的に発展させるためにブルジョア議会に参加する議会主義的政治運動等は何れも、この大衆の自然生長性の表現と見る。かゝる運動を自然生長的（又は自然発生的、自発的）運動と総称し、かゝる傾向に即する運動理論を自然生長的理論、自然生長論 (Theorie der Spontanität) と呼ぶ。レーニン主義によれば、無産大衆が階級闘争に参加する第一歩は、資本主義の発展による生活の窮乏化に促されて、労働条件の改善乃至は労働立法の制定の如き、日常の経済

的政治的要求を獲得するための闘争にあつて、無産階級の解放、政治権力の奪取等を最初より目的とするものでないから、大衆の自然生長性は、資本主義の組織の埒内に於ける改良運動に止まるべき本質のものであるとする。従つて、経済闘争、組合運動、組合主義的政治闘争等は何れも自然生長的運動に属する。この自然生長性の運動が目的意識性の運動にならなければ無産階級解放の運動は達せられないとするのである。「自然生長の理論は日和見主義の理論であり、また組合主義の理論である」といふのはこの故であり、自然生長性の闘争を部分的闘争、目的意識性の闘争を全面的闘争と呼ぶのもこの故である。」

ところで、『中央公論』の「大衆観」特集と同じころ、室伏高信が『大衆時代の解剖』という本を出した(一九二八・四)。この「大衆」像は、また異なつた相貌を見せる。室伏は前述の『社会主義批判』を著わしたあと、一九二〇年の暮から一九二一年の暮まで一年間、欧米を外遊してきた。改造社社長の山本実彦が、賀川豊彦『死線を越えて』の二〇万部に及ぶ売れ行きによる利益を活用するために企画したもので、室伏は時々『改造』に通信を寄稿すること、アインシュタインやベルグソン等を改造社で日本に呼ぶための交渉をしていくこと、という条件だった。室伏はイギリスではG・D・H・コール、ハインドマン、ヘンダーソン、ウエップ夫妻、ジョン・バーンズ、H・G・ウェルズ、カーペンター等、ドイツではアインシュタイン、マックス・ペーア、カウツキー、ベルンシュタイン、エーベルト等、フランスではベルグソン、ロマン・ローラン等、アメリカではサミュエル・ゴンパース等に会見し、その『改造』に寄稿された印象記は、帰国後『印象と傾向』にまとめられた。そして滞欧中に入手した、ラーテナウの『来るべき事物』およびシュペングラーの『西洋の没落』との出会いと衝撃にもとづいて、一九二二年一二月号の『中央公論』に「創造人の宣言」を書く(↓「シュペングラー」室伏)。これによつて室伏は、従来の「思想紹介者」としての社会評論家から、「自己表現者」としての「文明批評家」に生れ変わったという自覚をもち、一九二三年一二月



『文明の没落』を自費出版した。これと翌年一二月刊の『土に還る——文明の没落 第二巻』を合せて八、九万の売れ行きを見たことで、これを機に完全に社会主義と袂を別ち、また、「近代主義の総括的な絶滅」をめざし「世界観としての進歩の思想を否定」する、「野に叫ぶ」ジャーナリストというスタンスを確立する(『人間記』一九三四)。その「文明の没落」シリーズの第三巻が『大衆時代の解剖』なのである。

「大衆の時代が来たのだ」というその宣言は、室伏が翌一九二九年に『アメリカ——其経済と文明』や『街頭の社会学』を刊行し、さらに『銀座風景——高度文明解剖』(一九三二)や『中間階級の社会学』(一九三三)を著すにいたる時代認識にもとづくものである。すなわち、一九世紀ヨーロッパ的な「都市の紳士と知識階級」の文明から、二〇世紀アメリカ的な「大衆」の文明へという構図である。その「工業主義と機械主義」による「フォード」的な「大量生産」、「大社会」化、「技術化」の進展は、一方では、「画一化、中庸化、平凡化、非人格化、非芸術化、非文化化」としての「世界の大衆化」と、それに伴う「野獣化」をもたらす。「ジャズ」と「キネマ」と「スポーツ熱」の世界の流行や「ハアスト的なジャアナリズム」の制覇がそれである。しかし他方、こうした「大衆」が今や「時代の寵児」となろうとしている。「政治家も、実業家も、小説家も、画家も、音楽家も、今日は先を争つて媚を大衆に売らんと」する。「大衆的評価の時代が来たのだ。……大衆に適した価値を、大衆のための価値を、大衆によつての価値を。……大衆は既に主人の席に即きつゝある。昨日の奴隷的な大衆の代りに、今日の主人としての大衆がある」。

一九世紀の産業資本主義段階におけるブルジョア社会にとっては「非存在」だったプロレタリアート階級が、二〇世紀の「金融資本主義」の段階においては、新「中間階級」の増大とあいまって圧倒的な人口量を占めるにいたり、いまや体制内在的な「大衆」として「主人」の地位につこうとしているというのである。しかしこの「大衆」は、一

九世紀の理性的な「紳士と知識人」とちがって「非合理的」であり、「知識」でなく「意志」を、「理性」でなく「激情」を、「意識」でなく「本能」と「直観」を求めるから、「疲弊した欧羅巴的民主主義」ではなく「独裁政治の野蛮主義」と結びつく。かくて「ムツソリニ、レエニン、プリモ・デ・リベラ、蔣介石」のごとき「一つの強大な意志、英雄」が待望されるという。こうして室伏は、『ファッショとは何か』（一九三二・二二）、『ファッショかマルクスか』（一九三二・二二）等を著すにいたる。が、ムツソリーニがローマ帝国を夢みたり、ヒトラーがチェコ併合に取りかかりたりした頃から、批判的立場に転じたという（『日本ファッショを批判する』一九三二・二二）。

#### 四 「モダン日本」からファッショへ

一九二九年は、一〇月二四日にニューヨーク株式が大暴落し世界恐慌が始まった年だが、前年（三・一五）に続く四・一六の共産党員の大検挙、東大新人会や各大学の社会科学研究会の解散、山本宣治の暗殺、張作霖爆殺事件の責任を取っての田中内閣総辞職等々、ファッショへ向かう動きのかたわら、「モダン日本」が喧伝された年でもあった。巷に「東京行進曲」や「君恋し」が流れ、最初の本格的トーキー映画が封切られ、浅草にカジノ・フォリーが発足、「モボ」と「モガ」が銀座を闊歩し、「エロ・グロ・ナンセンス」が流行る。（震災後の「東京復興」を中心とする都市化が、市民による自治的秩序形成を欠落した歓楽街的「消費都市」化だったことにもよる。）それに「マルクスボーイ・エンゲルスガール」の風俗（菜っ葉服に鳥打帽で安煙草をくわえる）や、「何が彼女をそうさせたか」等の「傾向映画」が共存する。（東京に子弟を遊学させる親達は、彼らが「赤く」なるよりはむしろ「桃色」を望んだ。）同時に「サラリーマンの恐怖時

代とその解放」を青野季吉が書き、『改造』(二月号)、小津安二郎監督による「大学は出たけれど」が作られる大失業時代でもあった。

この年の雑誌『中央公論』と『改造』の「特集」から若干を拾ってみよう。◇(中公二月)「スポーツとマルクスとシネマ」◇(中公二月)「モダン・ライフ再吟味」(形式と速度への生活)片岡鉄兵、「モダン層とモダン相」大宅壮一、「性の交換」上司小剣、「何かうまい仕事は?」高田保、「カフェ社会学」室伏高信、「舞踏場素描」新居格◇(改造六月)「モダン生活の氾濫」(「モダン綺語」丸木砂土、「モダン生活と変態嗜好性」権田保之助、「モダン商売往来」小汀利得、「貧乏の享樂化」赤神良讓等)◇(中公二月)「モダン日本の近景」(「モダン日本とは」片岡、「カクテル日本の遠景近景」室伏、「百パーセント・モガ」大宅、「陣痛期のプロレタリア音楽」兼常清佐、「カクテルの構成分」林房雄、「現代アナクロニズム情景」村山知義。この「モダン」感覚のあらわれとして、高須芳次郎が『大百科』の「新感覚派」に書いているところによれば、「……例を挙げると、「仁丹の広告塔が、ぱつと頭の中を赤く染めた」とか、「急行列車は沿線の小駅を小石の如く黙殺した」とかいふ類である。なほテンポを急速にすることもまたこの派の一要素であった」。

こうした「大衆」の「モダン相」を対象に、下中弥三郎は大衆雑誌『平凡』の発刊を試みた。『現代大衆文学全集』に続いて一九二八年に刊行開始した『世界美術全集』(全三六巻)も予約二万五千部を獲得して成功したことで経済的余裕を生じたからである。(なお円本の全集としては、同年から『社会思想全集』全四〇巻、『新興文学全集』全二四巻も刊行を開始。)一九二八年一月に創刊した『平凡』は、菊判五百頁を超える大雑誌で定価五銭、当時大衆雑誌の王者といわれた講談社の『キング』(一九二五・一創刊)が発行部数一〇〇万といわれた向こうを張って、創刊号は六〇万部を刷った。創刊号には、後藤新平「大なる希望を将来に繋ぎて」以下の「論文」もあったが、目玉はむしろ「創作」

と「読物」にあった。とくに後者の特集「銀座解剖縦横記」「銀座漫談会」「銀座とデパート」「波多野さんとストリートガール」等や「便衣隊綺談」「性と恋愛座談会」等である。

が、この雑誌は返本二十七万部で、さすがの下中も支えきれず、一九二九年三月、第五号で廃刊せざるをえなかった。この『平凡』の赤字が原因となり、平凡社は一九三一年一月末、一〇〇万円の不渡り手形を出して破産した。二月二日の債権者会議で下中は、債務は全部無利息で一ヶ年据置きにし手形を債権者に買い戻してもらおうという提案をし、債権者側の博進社（用紙）、共同印刷、博報堂（広告）にたいして、またもや高橋守平副社長所有の田畑四三町歩と、山林四七町歩を、債務二〇万円の共同担保に設定することで、再起の道を開いた。そして同年六月、起死回生の大型企画として下中が打ち出したのが、本『大百科事典』である。

この『大百科』の刊行が始まった一九三二年は、柳条湖事件を契機にいわゆる満州事変が勃発した年であった（『満州事変』小玉樽次郎）。満州事変前後は、明治維新以後の近代日本思想史において、日露戦争前後につづく一大転形期であった。それ以前のさまざまな思潮がそこに流れ込み、変貌を遂げてそこから出てゆく転形期である。そこで、これまで見てきたような様々の「改造」の「イデオロギー」の「せめぎあい」にいわば「決着」がついて、軍国主義・ファシズムの方向に決定的に踏み込んで行く転機になったのが満州事変であった。そうした状況と動向を象徴する存在として下中弥三郎の軌跡とその『大百科』を見ることも可能である。下中自身は『大百科』には項目執筆していないけれども、一九三九年の「新装特価版」には「大亜細亜主義」と「東亜共同体」の二項目を書いている。じつは下中には早くからアジア主義的な国民運動に共感してゆく側面があった。

下中は一九一九年八月、啓明会創設と同時期に「老社会」に加盟している。『大百科』の「老社会」（満川亀太郎執

近代日本思想史の中の『大百科事典』の成立と下中弥三郎（飯田）

筆)によると、同会は一九一八年一〇月、「満川亀太郎、岡悌治を世話人とし、佐藤綱次郎、上泉徳弥、川島清治郎、中島信虎、小林俊三郎、島中雄三、大井憲太郎、亀井陸良等を発起人として創立された思想団体」である。発起人の一人、島中雄三は、前述のとおり下中の明治末年来の同志的親友であり、その島中が組織した前掲「文化学会」の主要メンバーに岡悌治がいたから、下中の老社会への参加も島中の媒介によると見てよいだろう(島中は一九四〇・九・没)。満川は「老社会の特色は国家主義者と社会主義者と、陸海軍将官と労働者と、精神主義者と唯物主義者と、老人と壮年と、婦人と青年とが、各自膝突き合わせて議論研究を続けた点にある」という。発足当初の主な顔ぶれは、上記発起人のほか、大川周明、中野正剛、高島素之、遠藤無水、鹿子木員信、沼波瓊音、渥美勝、笠木良明、北原竜雄、岩田富美夫、平貞蔵、小栗慶太郎、高尾平兵衛、権藤成郷、堺枯川、等であり、毎月数回会合して一九二一年まで続いた。一九一九年八月、かねて北一輝の『支那革命外史』に共感していた満川ら「老社会中の国家主義を奉ずる」グループが、日本改造のために北を上海から迎えるべく大川を上海に派遣し、北が五・四運動下の上海で断食して書き上げた『日本改造法案大綱』を持参して帰国、北・大川・満川が中心になって「猶存社」を組織する(↓「猶存社」満川)。下中はこれには参加しなかったが、満川とはその後も交流を保ち、のち、五・一五事件(一九三二)前後に満川が大川と訣別——北と大川・満川とは一九二四年に別れ、後者は「行地社」を組織——して以後、満川は下中の「国民思想研究所」について「大亜細亜協会」(一九三三創立)の中心的なメンバーとして加わった。満川が一九三六年に急死した直後、下中は雑誌『維新』の満川追悼号(同年八月)に彼を悼む口語詩と追想記を寄せている。

また下中は、一九二五年一月、石川三四郎、中西伊之助、渋谷定輔らと「農民自治会」を結成する。下中が起草した同会の「創立趣意書」は「都会は、農村の上まへをはねて生きてゐる、農民の汗と血の塊を横から奪つて生きて

ゐるのである。……我等農民も人間だ。生きねばならぬ。……諸君起たう、みんな手をたづさへて起たう」と言い、「標語」として「一 農民自治の精神に基き……一 共同扶助の精神を以て……一 都会文化を否定し、農村文化を高調す」と謳う。そして一九二七年三月に出された「宣言」（中西・渋谷の起草）は、「吾々無産農民は、この無産階級の最後の全的解放を要求するために、進んで都市労働者とその共同戦線に就かんことを欲するものである」と結ぶ。これは第一回「普選」を翌年に控えて無産諸政党が分立し離合を繰り返している中での独自の動きであった。しかし一九二八年五月、全国農民組合（全農）結成にともない、傘下の有力県連だった埼玉や長野がそちらに合流する等で、農民自治会全国連合は解散し、機関誌『農民自治』も一八号で終刊となった。同じころ（一九二七・二八）、下中は権藤成郷『自治民範』を平凡社刊として出している。無産運動の一環であった下中の「農民自治」思想が、権藤的な「君民共治・社稷自治」の「農本」思想に傾斜しようとしていたのであるうか（↓「農本主義」室伏高信）。

ともあれ彼の農民自治思想による政治的実践運動への情熱は、一九三二年一月、「日本村治派同盟」の創立で、もう一度燃え上がる。これは加藤一夫、風見章、辻潤、武者小路実篤、権藤成郷、橋孝三郎、高須芳次郎、土田杏村、室伏高信、小野武夫ら、政治家や農民運動家よりも文化人を中心とした人たちを発起人とし、「都市文明中心主義的或は機械工業至上主義的見地」を排して「新社会の構成単位を村落自治に置く農村主義的社会改造」を目指す研究・実践団体たらんとしたもので、下中は創立発起人会の議長をつとめ、一二名の執行委員会の委員長に推された。しかしこの村治派同盟は結局、見るべき活動もなまま雲散霧消した。

以後の下中は、一方で国民社会主義的な運動に、他方でアジア主義的な運動に、急速にコミットしていく。前者は、流産した「日本国民社会党準備会」（一九三二・一・一七結成）に始まり、「新日本国民同盟」（一九三二・五・二九結成）

にいたる動きである（↓「國民社会主義」室伏）。新日本國民同盟は、「建国の本義に基き、搾取なき新日本の建設を誓ふ」という「盟誓」のもと、「一、吾等は合法的國民運動により、金權支配を廃絶し、以て天皇政治の徹底を期す。一、吾等は資本主義機構を打破し、国家統制經濟の実現により、國民生活の確保を期す。一、吾等は人種平等資源衡平の原則の上に、新世界秩序の創造を期す」を「綱領」とし、下中弥三郎を総務委員長に、天野辰夫、満川龜太郎、中谷武世、近藤栄蔵、神永文三らを中央常務委員に、権藤成郷、鹿子木貞信、小野武夫、貴志弥次郎（陸軍中將）を顧問に、島中雄三を相談役に配した。が、折から平凡社の経営が苦境に陥ったので、まもなく下中は総務委員長を辞した。また同年六月、「國民思想研究所」がほぼ同じ顔ぶれで設立され、月刊『國民思想』を発行したが、この雑誌に下中が「維新物語」として連載したものが、『維新を語る』（一九三四・四刊）である。

他方、下中のアジア主義運動へのコミットメントは、一九三三年三月の「大亜細亞協会」創立で鮮明になる。すでに一九三二年四月、下中を中心に中谷、満川等にインド人のラス・ビハリ・ボース（↓「ボース」中谷武世）やヴェトナム人のコンデイ等を加えて「汎亞細亞学会」が出来ていたが、これを母体到大亜細亞運動を展開すべく、近衛文麿を發起人として百数十名の名士を糾合し同協会となったものである。その名称の由来は「大百科」の下中執筆「大亜細亞主義」にも引かれる孫文（↓「孫文」松井等）が日本で行なった講演である。大亜細亞主義（中国語で「大亞洲主義」とは、「久しく西欧白人文明の搾取と圧制に悩んできた、亞細亞の解放復興、自主自強」を実現すべく「日本が東方王道文化の総本山」となり、「一個の運命協同体」としての亞細亞民族の福祉と發展のため「一体としての亞細亞の自覚とその有機的結合」を求めるものである。また「東亞協同体」とは「独自の民族個性を生かさんとする地域の類縁的民族、又は國民の有機的結合体」だとされ、「領土的侵略を意図する近代帝國主義の性格を有しない」こと

が強調される。

しかし、以後の下中の行動と思想を辿ることは、「大百科」との関連で見る本稿の域を超える。下中は戦後の「戦犯追放」の動きの中で、戦中の「一、大日本興亜同盟本部常務理事、運動第一部長 一、興国同志会理事 一、大亜細亜協会理事長」としての活動を理由に公職追放となる。そして晩年は「世界連邦アジア会議」や「世界平和アソシエーション委員会」の仕事に全力を尽くして、八三年の生涯を終えた。

一九五五年に書いた「世界大百科事典第一巻をおくる」の中で、下中は「出版を教育事業と考え」と言う。そこには、小学校教師から出発して出版事業に乗り出した彼の歩みに裏づけられた信念が吐露されていると同時に、彼が埼玉師範時代に「大聖カント」と呼ばれていたというエピソードからうかがえる、一八世紀的啓蒙主義の精神に通じるものが感じられる。彼にとっての「大百科」は、まさに一八世紀「百科全書派」の啓蒙精神に通底していたのではないか。しかも彼は、それを二〇世紀的な「知の大衆化」の時代の需要に応える「商品」としても成功させようとした。そこには、たんなる「文明開化」的な「知の博覧会」、ないし大衆消費の情報カタログや「知のパノラマ」の提供にとどまらないものがあった。むしろ異質・多様な思想文化の接触・刺戟・交流の場到大衆を積極的に引き込むことによって、大衆の自立性・能動性を引き出し、元来彼らが持っているはずの「草莽」のエネルギーを解き放つという、「教育」機能も秘められていたのではなかったか。

にもかかわらず、デモクラシーと社会改造を求める動きから出発した彼をして、「国家社会主義」と「大アジア主義」への「頓落」の道を歩ませたものは何だったのか。要するにそれは、一八世紀的啓蒙精神にあった個人の「自



律「自治」能力、ひいては「理性」への信頼の喪失、したがってまた、「平凡」な意味での自由主義と民主主義への信頼の喪失に起因するのだろう。それに代わって前面に出てきたのが、「日本」という偶像（↓「日本ナルシシズム」）と「すめらみこと信仰」（一九三七年、同名書を刊行）、さらには「昭和維新」と「大亜細亞主義」の「イデオロギー」であった。